

“ものづくり福井”のルーツを探る！

(第2期: 中世・近世の越前焼と石工(城づくり))

みどころ

福井県教育庁埋蔵文化財調査センターは、文化財保護法にもとづく埋蔵文化財保護行政の一環として、県内各地で発掘調査をおこない、調査成果を『福井県埋蔵文化財調査報告』として刊行しています。その成果には、ふるさと福井の歴史を語る出土品が数多く含まれています。

今回は、数千年にわたる歴史の流れのなかで、福井に花開いた“ものづくり”の「技(わざ)」にスポットをあて、企画展を開催します。これらは、“ものづくり福井”のルーツといえるもので、福井の特色のある自然環境や生活文化にねざして、人びとがみだしたものです。

第2期は、越前焼からみた「焼物づくり」と、近世の「城づくり」をとりあげ、関連する出土品や、発掘調査時の写真パネルを展示いたします。

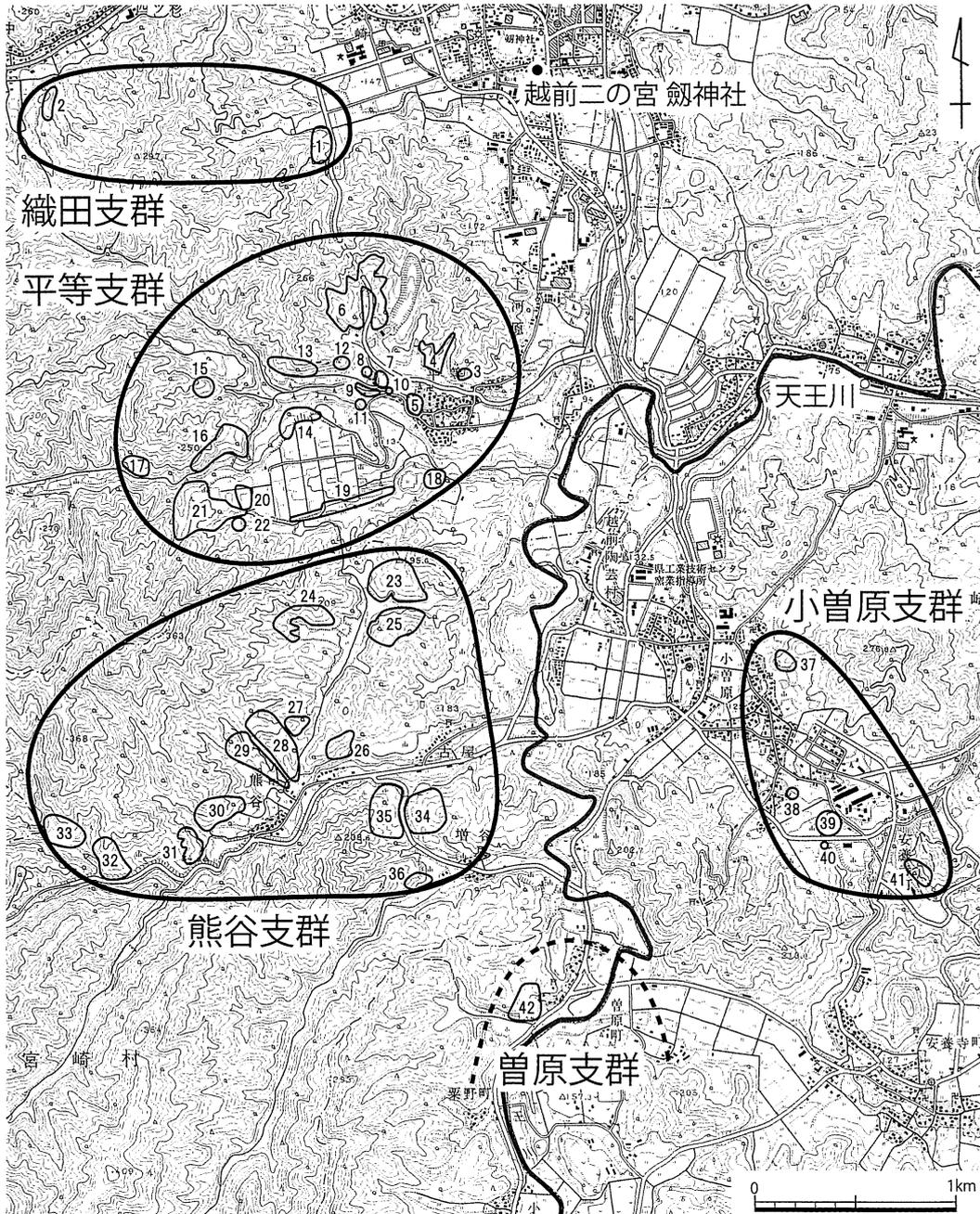
これから、第2期の展示のみどころをご紹介します。

① 発掘された越前窯

福井県の伝統工芸品の1つである越前焼の生産は、愛知県の常滑窯から生産技術を導入して、平安時代末期の1190年頃に始まりました。現在約170基の窯が、丹生郡越前町織田・宮崎地区と越前市北部でみつかり、それらは天王川に合流する小河川の流域ごとに、小曾原(おぞわら)、曾原(そはら)、熊谷(くまだん)、平等(たいら)、織田(おた)にまとまって支群を形成します。このうち小曾原・曾原・熊谷支群は国衙領の山干飯保(やまかれいほ)、平等・織田支群は劔神社を荘領主とする織田荘に属します。越前焼は国衙領に属する小曾原支群で開窯し、13世紀後半頃には全ての支群が稼働しますが、曾原・織田支群は短期で、熊谷支群は15世紀末葉に生産を止めます。以降は平等支群のみで生産が行われて現在に至ります。

生産器種は現在とは異なり、生活必需品である貯蔵具の甕や壺、調理具の鉢類が主ですが、南北朝時代までの製品に宗教的性格を有するものがあるように、それぞれの時代の需要に応じて変化していきます。

今回の展示では、当センターが実施した西山窯跡群、小足谷窯跡群、馬戸窯跡群、釜屋谷窯跡群、大釜谷窯跡群、平等北窯跡出土遺物により生産地遺跡の様相を、越前・若狭の集落遺跡や城館、中世墓や経塚出土遺物などにより消費地遺跡の様相をみていきます。なお、西山窯跡群出土遺物の一部は、県の指定文化財となっています。



- 1:西山窯跡群 2:山中窯跡群 3:正信坊窯跡群 4:上平等窯跡群 5:平等劔神社窯跡 6:上平窯跡群
 7:平等北窯跡 8:北釜屋窯跡 9:平等西窯跡 10:葵園 11:口西平窯跡群 12:上鍵谷窯跡群
 13:城ヶ谷窯跡群 14:丸山窯跡群 15:小足谷窯跡群 16:木松郎窯跡群 17:上外ヶ谷窯跡群 18:中平窯跡群
 19:上大師谷窯跡群 20:松尾谷窯跡群 21:大釜屋窯跡群 22:大釜屋窯跡群E 23:奥堂の谷東窯跡群 24:奥堂の谷西窯跡群
 25:下向窯跡群 26:北下向窯跡群 27:大谷窯跡群 28:奥釜井谷窯跡群 29:釜屋谷窯跡群 30:水上窯跡群
 31:上ヶ平窯跡群 32:馬戸窯跡群 33:カマハナ窯跡群 34:フススベ窯跡群 35:漆谷窯跡群 36:上垣内窯跡群
 37:上長佐窯跡群 38:土屋2号窯跡群 39:土屋1号窯跡群 40:暮掛窯跡群 41:奥蛇谷窯跡群 42:曾原鼻谷窯跡群

1.越前窯跡群の窯跡分布図

◆ 西山窯跡群

西山窯跡群は越前町織田の織田支群に位置します。平成8(1996)年度に灰原部、平成 25 (2013)年に3基の窯のうち、1・2号窯の発掘調査が当センターによりおこなわれました。

発掘調査の結果、東海地方からの技術導入を示す窯の天井を支えるための分焰柱(ぶんえんちゅう)をもつ窯を検出しました。窯の規模は、1号窯は 14.5m、2号窯は 12.5mを測りますが、1号窯は当時期のものと比べ規模の大きい点が特徴的です。窯からの出土遺物は僅かですが、灰原からは大量の遺物が出土しました。器種は甕・壺・片口鉢が主ですが、甕は口径と器高から4つに分類できます。また壺には、鳥や蝶を描いた刻画文(こくがもん)を持つものや3つの横耳の付く三耳壺(さんじこ)のほか片口を持つものがあります。このほか仏教の経典を保護するための経筒(きょうづつ)や水注(すいちゅう)、人形の面や硯、分銅や陶錘、当時使用されていた土師質皿を真似た皿など、消費地遺跡ではあまりみられない特殊なものが出土しています。13世紀後半の様相のわかる貴重な資料で、県指定文化財となっています。



2.西山窯跡群遠景



三耳壺



経筒



刻画文のある壺



瓶



水柱



人面形陶製品

◆ 小足谷(こあしだに)窯跡群

小足谷窯跡群は越前町熊谷の熊谷支群に属します。平等川左岸丘陵の中腹に位置し、平成25(2013)年に1号窯の発掘調査が当センターによりおこなわれました。

発掘調査の結果、分焰柱をもつ窯を検出しました。窯の規模は12.5mを測ります。分焰柱際からは大きくゆがんだ甕が多く出土しましたが、なかには甕の成形を途中で止め、鉢の製作に変更したものなどがみられます。この鉢は口縁部に切り込みのある特殊なもので、類例がありません。西山窯跡群に続く、13世紀末葉から14世紀初頭頃の様相がわかる資料です。



9. 小足谷1号窯遺物出土状況



10. 口縁に切り込みのある鉢

◆ 馬戸(うまど)窯跡群

馬戸窯跡群は越前町熊谷の熊谷支群に属します。熊谷川左岸丘陵の中腹に位置し、平成26(2014)年に1号窯の発掘調査が当センターによりおこなわれました。

発掘調査の結果、分焰柱手前の燃焼部を検出しました。甕と播鉢が、少量出土しました。



11. 馬戸1号窯燃焼部検出状況



12. 越前窯独自の押印文のある甕

◆ 大釜谷(おおかまや)窯跡群

大釜屋窯跡は越前町平等の平等支群に属します。織田盆地の南西、平等集落から約1km南西の丘陵の山裾に位置します。岳ノ谷(だけのだん)の東斜面、大釜屋の北斜面と台地上に多くの窯がみられ、越前町の町指定史跡となっています。岳ノ谷に立地する窯は、国立歴史民俗博物館の発掘調査の結果、約 24mを測る大型の窯であることが判明しました。これら窯の上方には広い平坦面があり、居住地および作業場が存在したと推定されています。この平坦面からは尾根づたいに平等川を経て平等集落へ粘土や燃料などを運んだとされる「べと道」があります。平成 15(2003)年に大釜谷北斜面下の灰原の発掘調査を当センターがおこないました。

発掘調査の結果、15 世紀末葉以後に稼働するとして分布調査による見解を大きく遡る、13 世紀後半～17 世紀中頃の甕・壺・片口鉢・播鉢が大量に出土しました。このなかには「元享元年(1320)」銘の片口鉢など貴重な資料が含まれます。



13. 「元享元年」銘の片口鉢

◆ 釜屋谷(かまやだに)窯跡群

釜屋谷窯跡群は越前町熊谷の熊谷支群に属します。現在の熊谷集落の八幡神社の裏の丘陵に位置します。平成 26(2014)年に1号窯の発掘調査が当センターによりおこなわれました。

調査の結果、18.5mを測る大型の窯を検出しました。これまでの窯は製品を置く焼成部(しょうせいぶ)の床面傾斜が約 25 度でしたが、この窯は 35 度と急になります。また写真のように、焼成部後方から煙を出す煙道部まで天井がありませんが、ここには窯炊き時に仮設天井が架けられたと思われます。出土遺物は主に甕・擂鉢ですが、ほかにも火を受けて赤く変色した方形の耐火石があります。窯を支えるための分焰柱の部材に用いられたものですが、生産量を増やすための窯の大型化に対応した、当時の陶工の知恵がしれる貴重なものです。15 世紀後半のこの窯の特徴は、16 世紀の大量生産・広域流通を実現した窯へと受け継がれていきます。



14. 釜屋谷1号窯焼成部・煙道部検出状況



15. 耐火石出土状況



16. 分焰柱に使用された耐火石

◆ 平等北(たいらきた)窯跡

平等北窯跡は越前町平等の平等支群に属します。窯は平等集落をやや外れた北側斜面に位置します。平成 24(2012)年に1号窯の発掘調査が当センターによりおこなわれました。

発掘調査の結果、中世の窯と構造が異なる連房(れんぼう)式登窯を検出しました。この窯は複数の焼成室である房が連なるものです。房は壁で仕切られ、焰を通す孔で繋がっています。

出土遺物は主に甕・播鉢、18 世紀末葉以降に量産される轆轤目の顕著な壺や鉢、卸板や炭火を運ぶ際に使用する十能(じゅうのう)など、江戸時代の生活を表す多様なものがみられます。このほか注目すべきものに、鉢と播鉢数点が溶着したものの、製品を詰める際に使用した窯道具があります。量的に多いのが円筒形で側面に孔のあいた焼台ですが、これは信楽窯で多く使用されており、同窯からの技術導入を示しています。これらは、幕末頃の越前窯の様相をしるうえで欠かせない貴重なものです。



17. 平等北窯跡全景



18. 轆轤目が顕著な壺



19. 十能



20. 窯道具

◆ 消費地遺跡出土の越前焼

消費地遺跡から出土する越前焼は甕・壺・鉢類が中心ですが、それらは遺跡の性格に応じて使われ方が異なります。集落や城館で出土する越前焼は、甕・壺類は貯蔵具、鉢類は調理具に使用されていますが、中世墓や経塚では、甕や壺は骨や遺体を納める蔵骨器や甕棺、仏教の経典を保護する経筒を納める外容器に、鉢はそれを覆うための蓋に使用されています。甕や壺には蔵骨器に使用する際に、意図的に口縁部を打ち欠いたものがみられ、当時の宗教観の一端がうかがえます。このような遺跡の例をあげると、嶺北地域では永平寺町諏訪間興行寺(すわまこうぎょうじ)遺跡の中世墓、嶺南地域では敦賀市坂ノ下中世墓群やおおい町山田中世墓群、小浜市田烏(たがらす)元山谷遺跡のほか、おおい町石山城跡の経塚などがあります。当時の海運の要であるという地理的環境のため、嶺南地域からは珠洲焼や常滑焼や瀬戸焼、信楽焼や東播系須恵器などの他生産地のものも一定量出土しています。



21. 田烏元山谷遺跡遺物出土状況



22. 田烏元山谷遺跡出土遺物



23. 坂ノ下中世墓群遺物出土状況



24. 坂ノ下中世墓群出土遺物

② 近世に現れる「石づくりの城」

安土桃山時代(1573～1603)、室町幕府の事実上の滅亡から、江戸幕府が開かれるまでの期間に、城づくりの様相が大きく変化します。高い石垣と、重厚な瓦、恒久的な礎石建物の三者が揃った建物が出現し、近世城郭築城の主流になっていったのです。いわば、「土づくりの城」から「石づくりの城」への転換です。

近世の城は、中世以上に城主の権力や威信を示すための「見せる城」という側面があることが、石垣・瓦・礎石建物の三つから読み取れます。築城には、城主の絶大な権力と経済力を背景に、大規模な労働力を投入して大がかりな土木工事が行われました。そこには、石工や瓦工といった、高度な技術を持つ技術者集団の存在がありました。

今回の展示では、福井城跡と小浜城跡という、越前と若狭を代表する近世の城について取り上げ、石工をはじめとする職人の技に迫ります。

●福井城跡

福井城跡は、福井平野南部にある足羽(あすわ)山の東北、足羽川と荒川の合流地点の北側に位置します。福井城が築かれた地は、もともと北庄(きたのしょう)と呼ばれる、朝倉氏の一族が居館を構えた町でした。足羽川と北陸道が交わる交通の要衝でもあり、交易も盛んに行われていたと考えられます。

天正元年(1573)、越前を支配していた朝倉氏が滅亡した後、一向一揆の蜂起を経て、天正3年(1575)には柴田勝家(しばたかついえ)が越前支配の拠点を一乗谷から北庄へと移し、城の建設を開始しました。

慶長6～11年(1601～1606)、福井藩祖である結城秀康(ゆうきひでやす)は、越前68万石を治める居城として北庄城を大きく造り替えたとされています。その改修は、足羽川や吉野川の流路を改変するほどの大規模な土木工事を伴いました。

以降、城郭構造に大きな変化はありませんでしたが、城郭西側の外曲輪と城下の約1,700軒を焼いたとされる万治の大火(万治2年・1659)や、城郭や城下町の過半数が焼失したとされる寛文の大火(寛文9年・1669)が相次



25.「御城下絵図」(松平文庫) (福井県文書館保管)

いで発生し、加えて所領石高の変動や藩の統廃合などをきっかけとして、城郭・城下の街割など細部の様相はたびたび変わっていきました。その変遷は福井城の絵図でうかがい知ることができます。

明治に入ると近代化の流れに伴って城郭は役目を終えて、城下町の姿も徐々に失われていきます。そして、昭和20年(1945)の福井空襲、昭和23年(1948)の福井地震という二度の大きな災害とその後の復興事業により、城郭の面影はほとんど消え去ってしまいました。現在は、本丸の石垣と堀がかりうじて形を留めるのみとなっています。

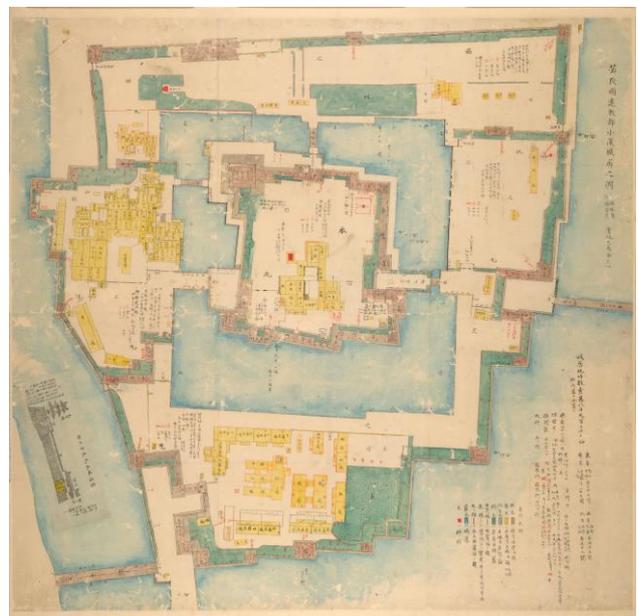
近年、連続立体交差事業(高架化)や北陸新幹線建設事業などにともない、当センターによる発掘調査が数次にわたっておこなわれました。調査の結果、武家屋敷地や町屋、道路、石垣などのほか、大量の陶磁器をはじめ、漆器や箸などの木製品や建築金具などの金属製品、硯や砥石などの石製品がみつかっています。

●小浜城跡

小浜城跡は、北川・多田川と南川の河口に挟まれた三角州に位置する水城です。慶長5年(1600)の関ヶ原の合戦時に東軍に味方した京極高次(きょうごくたかつぐ)は、大津城籠城の功績を評価され、若狭一国8万5000石を与えられました。京極高次は、武田氏が築いた後瀬山(のちせやま)城から雲浜(うんぴん)の地へ拠点を移し、築城を開始しました。城はのちに小浜藩主となった酒井忠勝(さかいただかつ)によって完成し、酒井家が代々修理・維持をおこなってきました。

本来の小浜城は総面積およそ19,000坪もある広大なものでしたが、明治初期の出火や天守の解体により、現在はかりうじて本丸の石垣が3分の2ほど残されるのみとなり、県指定史跡となっています。また、本丸のあった場所には明治8年に小浜神社が建立されました。

国道162号改良工事に伴い、平成30～令和3年にかけておこなわれた当センターによる発掘調査の結果、石垣や米蔵の基礎などがみつき、京極氏期と酒井氏期の城の様相が明らかになってきました。



26.小浜城郭之図(酒井家文庫)(小浜市蔵)



27.小浜城跡遠景

● 鍛冶と生産用具

鍛造鉄器を原料からつくるためには、大きく分けて3つの工程を経る必要があります。

まず、採集した原料(近世日本では主に砂鉄)を還元して鉄素材を得る工程が「製錬(smelting)」です。続いて不純物を取り除きかつ、炭素濃度を調整する工程が「精練(refining)」です。この工程は「大鍛冶」とも呼ばれています。そして最後に「鍛造(小鍛冶)」の工程を経て製品が形作られていきます。

発掘調査では、それぞれの工程で設置された炉の一部などが遺構として確認され、使用された道具が腐らずに残った部分や、生成した不純物の塊が遺物として出土します。

今回は、小浜城跡と福井城跡で出土した鉄滓や鞆(ふいご)羽口を展示しています。



28. 小浜城跡から出土した鉄滓 小浜城跡

● 板石敷通路状遺構

福井城百間堀の前身である吉野川(いまの荒川)の西岸に、北庄城期(1575～1583年)に敷設されたと考えられる、笏谷石(しゃくだにいし)製の板石を階段状に並べた通路が見つかりました。

笏谷石とは、足羽山周辺で採れる石材で、約1600万年前の火山活動によってできたものです。軟質で比較的加工がしやすく、水に濡れると美しい青色になります。福井城では、石瓦・石垣・その他の建築部材にまで笏谷石が多用されました。

板石敷通路を構成する板石は40枚ほど見つかっています。確認できた通路の長さは約20m、一段一段の段差は比較的緩やかなものの、最上段と最下段の高低差は3.3mにもおよびます。通路の脇には素掘り溝(土留めされていない溝)が掘られており、通路が浸水しないように工夫が施されています。

また、板石の表面が著しく摩耗していることから、吉野川を利用して舟で物資を運ぶ際の、物資の荷揚げに利用されていた可能性があります。

この通路状遺構を構成していた40枚の板石の内の一部を、今回展示します。



29.北庄城期の板石敷通路状遺構

福井城跡(西口地下駐車場)

● 福井城を彩った石瓦

福井城跡において、石瓦は北庄城期より城の建物の屋根に葺かれていました。福井城期・北庄城期を通して、石瓦には笏谷石が用いられています。

天正9年(1581)に北庄城を訪れたとされ、後に柴田勝家の最期をイエズス会に報告した宣教師ルイス・フロイスは、「…城の屋根はすべていとも滑らかで、あたかも轆轤(ろくろ)で作ったかのように形の良い石で葺いてあった。」(※)と記しています。北庄城がいかに壮観だったのかがうかがい知れます。

北庄城期と福井城期の笏谷製石瓦の主な違いは、北庄城期の軒丸瓦(軒先を飾る丸い瓦)の紋様は三巴(みつどもえ)紋で紋様部分に黒漆が塗られたものもあるのに対し、福井城期では紋様が彫りこまれない無紋の軒丸瓦が使われた点です。

展示では、福井城期の建物に葺かれていた石瓦をご紹介します。いぶし瓦とは一味違う、石ならではの重厚さを体感してください。

※ 東野英光訳『十六・七世紀イエズス会日本 報告書』第Ⅲ期第6巻 同朋舎出版 1991年 219-220頁



30.北庄城期の三巴紋石瓦出土状況

福井城跡(新幹線)

● 石垣づくりの技術と石工

城郭に石垣が導入された背景には、寺院が抱える石工集団とその技術があります。矢穴技法という石材を切り出す技法は、13世紀に中国から渡来した宋人によってもたらされたとされています。当初は主に石造物などを造るための石材を切り出す技法として各地の寺院に伝わっていきました。福井においては、15世紀の平泉寺の石垣に矢穴の技術が使われています。

16世紀後半以降になると、城郭の石垣にも矢穴の技術が徐々に導入され始めます。そして慶長5年(1600)



31. 矢穴痕 小浜城跡

の関ヶ原の合戦後、全国で起きた築城ラッシュを契機として、矢穴技法が一気に各地に広まりました。

石材の採石や加工など城の石垣づくりを担った石工集団は、通常、寺社勢力の元で働いています。築城に際して、城主に雇われて石垣づくりを担ったのではないかとされています。

小浜城の石垣には、それまで若狭にはなかった矢穴の技術が用いられています。京極高次は、近江の石工集団(穴太(あのを)衆)を従えて若狭に入国し、小浜城築城に臨んだのでしょう。また、福井城でも穴太衆が石垣づくりに携わったことが考えられます。

● 二つの城の石垣

福井城と小浜城が築かれた福井平野や小浜平野は、河川堆積物などにより形成された沖積平野のため、地盤が軟弱で石垣を築いても不同沈下(ふどうちんか)を起こす恐れがありました。その対策として、福井城では木材を梯子状などに組んだ石垣の基礎(胴木組(どうぎぐみ))が多く採用されました。小浜城でも胴木組が敷かれた石垣はありますが、砂上であるにも関わらず胴木組を用いていない石垣も確認されており、地盤の砂を何等かの方法で水抜きして強固にした可能性があります。

使用する石材についても、福井城期の福井城の石垣にはすべて笏谷石が用いられている一方で、小浜城では花崗岩(かこうがん)が比較的多く用いられました。

それぞれの城の石垣を写真パネルでご紹介します。両者の違いを見比べてみてください。



32. 三ノ丸南石垣の胴木 福井城跡